

要旨

目的：がん専門病院の集中治療領域においてがんの治療に伴う緊急症により終末期を迎えた患者・家族との関わりで生じる看護師の困難感を明らかにすることを目的とした。

方法：全国のがん専門病院の集中治療領域に勤務する看護師（入職1年未満、終末期ケアの経験がない、認定・専門看護師の資格を有する、ELNEC-JCCの受講歴のある看護師、病棟管理者を除く）400名を対象とし、無記名自記式質問紙調査を行った。ICU看護師の終末期ケア困難感尺度（以下DFINE）と、関連要因として一般病棟における終末期がん患者のケアに対する困難感尺度、対象者の属性を調査し、得られたデータを統計的に分析した。調査期間は2018年9月～12月であった。

結果：対象者34名から有効な回答を得た。DFINEで最も高い困難感は【終末期ケアの環境を整えることへの困難感】（ 3.81 ± 0.64 ）であり、次いで【治療優先から終末期ケアへ転換することへの困難感】（ 3.58 ± 0.82 ）であった。一般病棟における終末期がん患者のケアに対する困難感尺度で、最も高い困難感は【患者・家族とのコミュニケーション】（ 2.95 ± 0.46 ）であり、次いで【患者・家族を含めたチームとしての協力・連携】（ 2.77 ± 0.50 ）であった。

DFINEとの関連では、一般病棟の終末期がん患者のケアに対する困難感尺度の【患者・家族を含めたチームとしての協力・連携】と、DFINEの【終末期患者と家族のケアへの困難感】（ $r = .702, p = .001$ ）との間で強い正の相関を認めた。看護師が関わった緊急症により終末期に至った患者数と全ての下位尺度の困難感で有意差を認めなかったが、【看取り】（ $r = .362, p = .035$ ）との間に弱い正の相関を認めた。集中治療領域での経験年数と【治療優先から終末期ケアへ転換することへの困難感】（ $r = -.343, p = .047$ ）との間で弱い負の相関を認めた。

結論：がん専門病院の集中治療領域においてがんの治療に伴う緊急症により終末期を迎えた患者・家族との関わりにおいて生じる看護師の困難感は、終末期ケアの環境、治療から終末期ケアへの転換、コミュニケーション、患者・家族を含めたチームとしての協力・連携に関連する困難感であった。がんの治療に伴う緊急症患者の終末期に関わることが多い看護師は、看取りに関する困難感が高い傾向を示した。チームとしての協力・連携に関する困難感が高いと、終末期の患者と家族のケアへの困難感が高い傾向を示した。困難感軽減のために、多職種チームでの協働を促進するための調整、終末期ケアに関連した包括的・系統的な教育、看護師へのサポートの必要性が示唆された。